



次の文章は、広島を舞台にした物語の一節です。主人公の「ヤスさん」は、妻を亡くして以来、男手一つで息子の「アキラ」を育ててきました。小学五年生になった「アキラ」は、野球の小学校対抗試合に向けて特訓を重ねていますが、ある日、「ヤスさん」の一言をきっかけに機嫌を損ねてしまいます。しかし、「ヤスさん」には「アキラ」の不機嫌の理由がわかりません。読んで、あの問いに答えなさい。

やれやれ、とヤスさんはため息をついた。思い当たることは、一つしかない。

「……野球でピッチャーになれんのが、そげん悔しいんか。しょうがなかるうが、実力の世界なんじゃやえ」
アキラの返事はなかったが、なにか不服そうに言い返そうとする気配は伝わった。

「外野の練習、しよるんか？」

アキラは顎あごをお湯の中に沈めて、アアかぶりを振ふる。

「はーん、とヤスさんはうなずいた。① やつとわかつた。そうかそうか、とアキラがいじらしくもなつた。

「すまんかつたのう、仕事仕事でおまえにも寂しい思いさせてしもうて。よっしゃ、明日は仕事を早じまいして、練習の相手しちやる」

父一人子一人なのだ。仕事は立て込んでいるが、それくらいのことではしてもいいし、しなければならぬだろう。キャッチボールは照れくさくても、ノックなら「獅子ししは我が子を千尋せんじんの谷に落とす」という感じで、悪くない。

ヤスさん、勢いよく湯船からでて、「明日は千本ノックじゃ！」と尻をパンパンと叩たたいて気合きあいを入れた。

ところが、アキラはそっけなく② 「お父さんは関係ないけん」と言った。「ぼく、*1しゅうん 照雲おじさんと練習する」
外野のノックではなく、ピッチング練習の相手をしてほしい——という。

「要するに、じゃ……」

話を切り出す前に、ため息がこぼれ落ちてしまう。納得がいかない。わけがわからない。しまいには電話口の向こうにいる照雲に對して腹さえ立つてくる。

「ええのう、おまえ、人気者じゃ。今度の市議選にでも出てみいや。③ ガキに選挙権があつたら一発で当選じゃ」

「……なにを言うてるんか、さっぱりわからんがな。どないしたんか、アキラが」

「じゃけん、おまえに野球のコーチしてくれ、言うとするよ」

悔しさが声にじむ。受話器を持つ手に、つい力がこもってしまう。腹立ちまぎれに事務所中をにらみ回すと、「私用電話厳禁」が口癖の支店長が渋い顔をして、そっぽを向いた。

アキラは今度の試合で、やはり先発ピッチャーを目指すのだという。エースの藤井くんには勝ち目が無いのに、外野に回るぐらいなら控えのピッチャーでもいい、とまで言った。

ヤスさんにはその理由がわからないから、外野の練習の話をして、アキラを怒らせてしまった。

「怒るスジじゃなかるうが、のう、ナマグサ。試合に出てナンボと違うんか。ピッチャーはだめでも外野で試合に出ればよかるうが。それが理屈じゃる？ 怒るほうがおかしいで、ほんま、よそのガキじゃったら頭一発はたいちやるところじゃ……おう、ナマグサ、聞いとるんか、ひとの話……ナマグサ？ もしもし？ おう、ナマグサ、返事ぐらいせんか、ボケが！」

一喝すると、相槌が途切れたままだった照雲は、やつと、ぼそぼそとした声で返した。

「聞こえんど、もつと大きな声で言えや」

④「……えらいがな」

「は？」

「アキラ……ほんまにえらいがな、ええ子じゃがな……わし、もう感動して感動して……」

涙交じりだった。

ヤスさんは、あちやあ、と受話器を持ったまま天を仰ぎ、目をつぶって、ため息をついた。

野球は試合に出てナンボ——高校時代、ベンチ入りの補欠にすらなれなかつたのに最後までがんばった照雲には、それは通じない。

「ヤス、おまえは考え違いをしとる。アキラのほうが、よっぽど野球の真髓をわかっとるわ」

説教の口調で言われてしまった。いや、それは、出来のいい息子を持った父親の口調だったのだろうか。

「人間、初志貫徹がいちばん大事なんじゃ」照雲はきっぱりと言う。「アキラが志を曲げんとがんばるとるのに、親父がさつさとあ

きらめてどげんするんな」

「アホ」ヤスさんは即座に切り捨てる。「ほんまの初志は、試合に出ることじゃろうが。アキラが試合に出られるにはどげんすれば

ええかを考えてやるんが親の務めと違うんかい」

「ヤス、それは妥協いこうんじゃ。人間、妥協しちやいけんのよ」

「妥協と違うわい、作戦じゃ」

自分がほんとうに言いたいことは微妙にニュアンスが違うような気がしたが、本をあまり読まないヤスさん、こういうときにうまい言葉を見つけれない。ただ、間違っているとは思わない。ピッチャーでは試合に出られず、外野に回るのならスタメンが約束されている。それでもなおピッチャーにこだわるのは、初志貫徹だのなんだのではなくて……。

「（A）を張ってもしようがなかるうが」

おつ、ええど、と自分の一言に思わず頬がゆるんだ。「作戦」よりはずっとすんなり来る言葉だった。

だが、照雲は「男の子には（A）が大事なんよ」と譲らない。「ここで外野に回ったら、アキラは大きゆうなってるから、ちょっと難しいことがあつたらすぐに脇へ逃げてしまうようになるぞ」

「大げさなこと言うな、アホ」

「……まあ、とにかく、アキラがそげん言うてるんじやったら、わしがウひと肌脱いじやるしかないのう」

うれしそうに言う。夢にまで描いていた「息子」とのキャッチボール——しかも、「息子」のたつての願いを受けて、である。

「夕方、アキラの学校まで行ってみるけん。どうせ校庭で練習しとるんじやろ。ヤスは今日残業か？もしアレじやったら、アキラの晩飯、わしが外で食わせちゃってもええし……おう、そうじゃ、ウチに連れて帰って幸恵の手料理でも悪うないのう」

張り切っている。使い古しのボールでは表面がツルツルして投げにくいだろうから、と新しい軟式ボールを持って行く、とまで言った。この調子なら、「今日から試合まで」^{*2} ヤクシンさんで特訓の合宿じゃ「あたり言い出しかねない。

「補欠は補欠どうし、仲良うやつとけ！」

⑤ ヤスさんは怒鳴り声とともに受話器を叩きつけた。

（重松清『とんび』より）

【語注】 *1 照雲おじさん……薬師院という寺の僧で、「ヤスさん」の幼なじみ。妻「幸恵」との間に子を望んでいたが、恵ま

れなかった。後に出てくる「ナماغサ」も照雲のこと。

*2 ヤクシンさん……薬師院のこと。

問一 —— ア～ウの意味として最もふさわしいものを、次の1～5からそれぞれ選び、数字で答えなさい。

ア かぶりを振る

- 1 がっかりして目をつぶる
- 2 腹を立てて押しだまる
- 3 ふてくされて横を向く
- 4 困ったような目を見る
- 5 首を振って否定する

イ 頬がゆるんだ

- 1 自信がわいてきた
- 2 納得してうなずいた
- 3 自画自賛してしまった
- 4 嬉しくてにこにこした
- 5 急に恥ずかしくなった

ウ ひと肌脱いじやる

- 1 親身になって相談に乗る
- 2 本気になって力を貸す
- 3 かげながら応援する
- 4 上着を脱いで運動する
- 5 努力して夢を実現する

問二 二つの（A）にあてはまる共通の言葉として、最もふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 見栄

イ 気

ウ 肩

エ 意地

オ 体

問三——①「やっとわかった」とありますが、この時「ヤスさん」はどのような気持ちでいますか。次のア～オから、最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 息子よりも仕事を大切にしている父にアキラが腹を立てているとわかり、どうすればよいかわからずに困っている。
イ 父に十分に相手をしてもらえずアキラが寂しい思いをしているとわかり、アキラのことをかわいそうに思っている。
ウ なぜ怒っているかを父に理解してもらえてアキラがほっとしているとわかり、仲直りができたことに安心している。
エ アキラが父の気を引くためにわざと反抗しているとわかり、いたずらに刺激しげきしない方がいいだろうと用心している。
オ アキラは父と仲直りをしたいのに言い出せずにいるだけだとわかり、仲直りのきっかけを作ろうと張り切っている。

問四——②「『お父さんは関係ないけん』と言った」とありますが、この時「アキラ」はどのような気持ちでいますか。次のア～オから、最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分の実力不足が原因でピッチャーになれない、という事実を受けいれることができずに、父に八つ当たりしている。
イ ピッチャーになるためには自分が努力するほかないのであり、父に頼るようなことはすまいと、強く心に決めている。
ウ ピッチャーとしてレギュラーの座を勝ち取りたい、という気持ちを父が理解してくれないことに、不満を感じている。
エ 父がピッチング練習をしてくれればピッチャーの座を勝ち取ることができたと、父のことを恨みがましく思っている。
オ 父が息子のレギュラー争いに対し熱くなりすぎていることをうつとうしく思い、父のことを冷ややかな目で見ている。

問五——③「ガキに選挙権があったら一発で当選じゃ」とありますが、この時「ヤスさん」は「照雲」に対して、どのような気持ちを抱いだいていますか。三十字以内で説明しなさい。

問六 —— ④ 「……えらいがな」とありますが、「照雲」は、「アキラ」のどういふところを評価しているのですか。三十字以内で説明しなさい。

問七 —— ⑤ 「ヤスさんは怒鳴り声とともに受話器を叩きつけた」とありますが、この時「ヤスさん」は、どういふことに腹を立てているのですか。次のア～オから、最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア アキラが悩みごとを父親に打ち明けず、照雲だけに相談することで、父親を仲間外れにしようとした、ということ。
- イ 照雲がアキラに気に入られたために、父親の意見をすべて無視して勝手に話を進めていこうとした、ということ。
- ウ 照雲が野球を知らない父親の意見など聞く価値がないと馬鹿にして、アキラの肩を持つてばかりいる、ということ。
- エ 照雲はアキラの気持ちをよく理解しているのに、父親である自分はなかなか理解することができない、ということ。
- オ 照雲のことを心の底でうらやましく思いつつも、その気持ちを照雲に素直に伝えることができない、ということ。

二
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

時計屋の主人は大層小柄の人だった。その小柄の人が店の脇に古机を置いて、背中を丸めて時計の修繕しゅうぜんをしていると、餘計よけい小さく見えた。手許てもとに古風な電燈でんとうを引き寄せて、いつ通りかかっても同じ恰好かっこうをしていた。

私はその田舎町に一ヶ月ばかり滞在していた。泊まっている宿がその時計屋の筋向いだったので、店の前を通ることも多かった。

私は懐中時計を打紐うちひもでズボンのベルト通しに結えつけて置くのが習慣になつていたが、どういう弾みか紐が切れているのに気が付かず、時計を道路に落とした。時計に対してこのような無作法むはふさをしたことは殆どほとんなかった。若い頃に、ズボンの隠しに入れたまま尻上りをして硝子がらすを割つた記憶はあるが、多分それ以来の失敗であつた。

何度も振ふつて耳にあててみたが「I」は止まつたままだった。その日宿へ戻る時にその時計屋へ持つて行つた。自分で落として置きながらこんなことを言うのは心苦しいけれども成なる可べく急いで修繕を頼んだ。すると主人は裏側の蓋ふたを開け、Aシンボウが折れているのを確かめながら、急いでやるけれども、同じシンボウが手許てもとにないので四日は貰もらいたいと言つた。心当りの仲間の時計屋に連絡をして、そこにあればいいが……。

その時私は今向いの宿屋に仮り住まいをしていることを話すと、それは困るだろうと言つて腕時計を貸してくれた。銀鍍金ぎんめつきが剥けて古いものだが、時間は正確だから、その間使つてくれと、遠慮する私に貸してくれたのだつた。借物の時計を、慣れない手頸てくびにはめて気になつて仕方がなかつたが、時計屋のイ好意いこういが嬉うれしかつたし、実際に大助かりだつた。

今から三十数年前である。

小さい時計屋の店には、さまざまの形の掛時計があつたが、その幾つかは振子が動いていた。それは売物ではなく、一応修繕を終えてから調子を見ている預り物であつた。「II」前に大事をとつて容よう子すを見られていた恢復期かいふきの連中であつた。

その振子の動き具合を見ていると、いかにもせつちや、ゆつたりBカマカマえているのやらしいろいて、時計の性格がよく分かつて面白かつた。これらの時計と一緒に寝起きしている時計屋の主人が、①それをどう感じてるかちよつと尋たずねてみたいような気があつたのだが、別に親しくもなく、今店に来て話をしたばかりの人にそんなことを尋ねるうまい言葉も思いつかないままに黙もつていた。

四日後に寄つてみると私の懐中時計は修繕が出来ていた。ウ重宝じゆうほうした腕時計を返して自分の時計を受取つた時に、主人の右手の黒光りしている柱に八角形の柱時計が掛つているのを見た。四日前に来た時にも同じ柱にあつたのかも知れないが、気が付かなかつた。

らしい。

腕時計を貸してくれた好意に対して何かこの店で買物をしたい気持ちもあつたが、それを餘り露骨に見せるのもいやで、何の意味もないように、それが売物かどうかを聞いてみた。

それは想像した通り時計屋の時計であつた。しかも大切な時計であるのが分かつた。その主人が生まれた時に、時計屋でもなかつた彼の父親が、別にそのキネンにという積りでもなかつたのだらうが買ったものだということだつた。ぜんまいは幾度か取換えたが、ずっと動いているそうだつた。そしてこんなことも話した。

この時計は、子供の頃には台所の柱に掛けてあつて、硝子が曇つて黄ばんで来ると、踏台に乗つてそれを拭くのが自分の役目だつたし、時計屋に奉公するようになってから、また自分で店を出すようになってからは尚更のこと、これだけは絶対に狂わせないように気を配つて来たそうである。

②そこまで深い結びつきが出来てしまうと、この柱時計が止まる日に自分の寿命も尽きるといふような気がして来るのはあるまいか、或いはこの時計に自分の運命が左右されている感じを常に抱くようになるのではないか。そんなことを私は咄嗟に思つたが、無論それは口にしなかつた。

それから十数年後にこの町を列車で通る機会があつて、私は途中下車をした。時計屋の主人が健在であるかどうか之急になつて訪ねて見た。方々の町の容子がどんどん變つて行くのに、ここは記憶にない新しい建物も殆ど見当らない程に變つていなかつた。時計屋の店もそのまま、矢張り訪ねてよかつたと思つたが、修理机のところには若い男の人がカクダイキヨウを片目にはめて背を丸めていた。そして右手の柱を見ると八角時計はなく、電気時計のビョウシンが静かに廻つていた。

私は店へ入つて尋ねる③氣持が急に消えてしまつた。主人は亡くなつたに違ひなかつた。そして自分でそれを望んだか、それとも家族が相談をしたかして、柱時計も主人と一緒にこの世から旅立つたのではあるまいか。

(串田孫一『四季』より)

問一 —— AとEのカタカナを、漢字に改めなさい。

問四 —— ①「それをどう感じているか」とありますが、作者は主人の心境を、どのように想像していますか。次のア～オから、最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 小さな変化も見のがすまいと、売り物にも修理した時計にも、常に細心の注意を払っている。
- イ 時計の持っていた悪い癖を見事に直したので、客に満足してもらえらるだろうと期待している。
- ウ それぞれの時計の性質を理解すればするほど、売ってしまうことに名残おしさを感じている。
- エ 修理した時計それぞれの個性を理解するにつれて、自然に家族のような親しみを抱いている。
- オ 客の持つて来た時計に対し、それぞれの性格を見きわめてから修理したいと張り切っている。

問五 —— ②「そこまで深い結びつき」とは、どういうことですか。四十字以内で説明しなさい。

問六 —— ③「尋ねる気持」とは、どういうことを尋ねる気持ちですか。三十字以内で説明しなさい。

問七 本文全体から、作者が時計というものを、どういう存在としてとらえていることがわかりますか。次のア～オから、最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 正確に時を刻み続けることによって、持ち主の人生を区切り、正しく導いてくれる、厳しくも優しい存在。
- イ 二つとして同じものがなく、使い続けるにつれて持ち主の人生と一体化して感じられる、いとおいしい存在。
- ウ 時々故障するからこそ愛着がわき、修理に費用や時間をかけることにさえ、かえって喜びを感じる存在。
- エ わずかな不注意で故障してしまう上に、借りた物や買ったばかりの物では役に立たない、やっかいな存在。
- オ 他人に借りたりゆずり受けたりすれば、自分の人格や人生を変えてしまいかねない、どこか不気味な存在。

三
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「時間どろぼう」という言葉を記憶している読者は多いだろう。ドイツの作家へⅠ～作『モモ』に出てくる言葉である。時間貯蓄銀行から派遣された灰色の男たちによって、人々の時間が盗まれていく。それをモモという少女が活躍してとりもどす。そのために彼女がとった手段は、ただ相手に会って話を聞くことだった。このファンタジーは現代の日本で、(A)重要な意味をもちつつあるのではないだろうか。

時間とは記憶によって紡がれるものである。かつて距離は①時間の関数だった。だから、遠い距離を旅した記憶は、かかった時間で表現された。「七日も歩いて着いた国」といえば、(B)遠いところへ旅をしたことになった。その間に会った多くの景色や人々は記憶のなかに時間の経過とともにならび、出発点と到着点を結ぶ物語となった。

しかし、今は違う。東京の人々にとって飛行機で行く沖縄は、バスで行く名古屋より近い。移動手段の発達によって、距離は時間では測れなくなった。

時間にとって代わったのはへⅡ～である。「時は金なり」ということわざは、(C)時間はお金と同じように貴重なものだから大切にしなければいけないという意味だった。ところが、次第に「時間は金で買えるもの」という意味が変わってきた。特急料金をはらえば、普通列車で行くより時間を短縮できる。速達郵便は普通郵便よりも料金が高いし、航空便は船便より費用がかさむ。同時に、距離も時間と同じように金に換算されて話題に上るようになった。

しかし、これは大きな勘違いを生むものとなった。金は時間のように記憶によって蓄積できるものではない。本来、金は今ある可能性や価値を、劣化しない紙幣や硬貨に代えて、それを将来に担保する装置である。いわば時間を止めて、その価値や可能性が持続的であることを認める装置だ。しかし、実はその持続性や普遍性は危うい約束事や予測の上に成り立っている。今の価値が将来も変わることなく続くかもしれないが、もっと大きくなったり、ゼロになるかもしれない。^{*1}リーマン・ショックに代表される近年の金融危機は、②そのことを如実に物語っている。

時間には決して金に換算できない側面がある。(D)子どもが成長するには時間が必要だ。金をかければ、子どもの成長を物質的に豊かにできるかもしれないが、成長にかかる時間を短縮することはできない。そして、時間が紡ぎだす記憶を金に換算することもできないのだ。社会で生きていくための信頼を金で買えない理由がここにある。信頼は人々の間に生じた優しい記憶によって育てられ、維持されるからである。

人々の信頼でつくられるネットワークを社会資本という。何か困った問題が起ったとき、ひとりでは解決できない事態が生じたとき、頼れる人々の輪が社会資本だ。それは互いに顔と顔を合わせ、時間をかけて話をする事によってつくられる。その時間は金では買えない。人々のために費やした社会的な時間が社会資本の元手になるのだ。

私はそれを、野生のゴリラとの生活で学んだ。ゴリラはいつも仲間の顔が見える、まとまりのいい十頭前後の群れで暮らしている。顔を見つめ合い、しぐさや表情で互いに感情の動きや意図を的確に読む。人間の最もまとまりのよい集団のサイズも十〜十五人で、共鳴集団と呼ばれている。サッカーやラグビーのチームのように、言葉を用いずに合図や動作で仲間の意図が読め、まとまって複雑な動きができる集団である。これも日常的に顔を合わせる関係によって築かれる。言葉のおかげで、人間はひとりいくつもの共鳴集団をつくる事ができた。でも、信頼関係をつくるには視覚や接触によるコミュニケーションに勝るものはなく、(Ⅲ)はそれを補助するにすぎない。

人間が発する言葉は個性があり、声は身体と結びついている。だが、文字は言葉を身体から引き離し、劣化しない情報に変える。情報になれば、効率が重視されて金と相性あひしやうせいがよくなる。現代の危機はその情報化を急激に進めてしまったことにあると私は思う。本来、身体化されたコミュニケーションによって信頼関係をつくるために使ってきた時間を、今私たちは膨大な情報ぼうたいたいを読み、発信するため費やしている。フェイスブックやチャットを使って交信し、近況きんきょうを報告し合う。それは確かに仲間と会って話す時間を節約しているのだが、(E)その機能を代用できているのだろうか。

現代の私たちは、^③一日の大半をパソコンやスマホに向かって文字とつき合いながら過ごしている。もっと、人と顔を合わせ、話し、食べ、遊び、歌うことに使うべきなのではないだろうか。それこそが、モモがどろぼうたちからとりもどした時間だった。時間が金に換算される経済優先の社会ではなく、人々の確かな信頼にもとづく生きた時間をとりもどしたいと切に思う。

(山極寿一『ゴリラからの警告』より)

【語注】*1 リーマン・ショック……二〇〇八年、アメリカの投資銀行リーマン・ブラザーズの倒産をきっかけに起こった、世界的な不況。

問一 へⅠへにあてはまる、『モモ』や『はてしない物語』の作者を、次のア～カから選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-----------|---|-------------|---|--------------------|
| ア | ルイス・キャロル | イ | ジョンサン・スウィフト | ウ | ルーシー・モード・モンゴメリ |
| エ | マーク・トウエイン | オ | ミヒヤエル・エンデ | カ | アントワーヌ・ド・サン・テグジュペリ |

問二 へⅡへへⅢへを補うのに最もふさわしい言葉を、次のア～カから選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 距離 | イ | 記憶 | ウ | 費用 | エ | 信頼 | オ | 身体 | カ | 言葉 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|

問三 (A)～(E)を補うのに最もふさわしい言葉を、次のア～コから選び、記号で答えなさい。同じ言葉が二度以上入ることはありません。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ア | ようやく | イ | たちまち | ウ | 果たして | エ | たとえば | オ | しばらく |
| カ | ますます | キ | ずいぶん | ク | あたかも | ケ | わざわざ | コ | もともと |

問四 —— ①「時間の関数だった」とは、どういうことですか。解答らんに記された主語に続けて、全体を二十字以内で説明しなさい。

問五 —— ②「そのこと」とは、どういうことですか。次のア～オから、最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア お金の価値が、状況によって大きく変わりうる、ということ。
- イ 時間は、お金や社会資本と同じように貴重だ、ということ。
- ウ 現代人が、時間をお金で買えると思っている、ということ。
- エ 現代社会では、距離を時間で計れなくなった、ということ。
- オ お金によって、価値や可能性が永遠に保たれる、ということ。

問六 —— ③「一日の大半をパソコンやスマホに向かって文字とつき合いながら過ごしている」とありますが、このことによって、社会からどういふものが失われていると、作者は考えていますか。二十字以内で説明しなさい。